

有志共立東京病院看護婦教育所

日本に近代看護教育を始めたのは高木兼寛であった。彼は明治15年(1882)8月に施療病院・有志共立東京病院を設立したが、明治17年(1884)10月には米国人宣教看護婦ミス・リード(Mary E. Reade)の助力を得て有志共立東京病院看護婦教育所を開所した。これは日本における本格的な近代看護教育の先駆けであり、それは現在の慈恵看護専門学校、東京慈恵会医科大学看護学科に続いている。

1. 有志共立東京病院の設立

高木兼寛は英国セント・トーマス病院医学校での留学を終えて明治13年11月に帰国した。海軍医務局に復帰し、海軍病院長に就任した。彼にはこれから成し遂げたい仕事があった。それは英国で学んだ患者中心の医療施設、つまりセント・トーマスのような医療施設を日本につくることであった。

セント・トーマス病院には、クリミア戦争の傷病者看護で有名になったナイチンゲール(F. Nightingale)が創設したナイチンゲール看護婦学校や彼女が設計したナイチンゲール病棟があった。英国全土から集められた“ナイチンゲール基金”によるものであった。高木がセント・トーマスにいたころは、彼女はすでに引退していたが、この両施設はもっともよく利用されていたので、彼女の患者中心の医療思想は高木にも大きい影響を与えた。

そのころの英国では、産業革命による貧富の差がひどく大きくなっており、これを緩和するために王室はセント・トーマス病院に貧しい病人を受け入れる窓口を設けさせ、無料で治療させるように要請していた。もちろん財源は

王室基金であった。また一般市民にも、富んだ人々が慈善的に病院に寄付、献金し、病気に苦しむ貧しい人々を助けるのは当然のことだという思想が浸透していた。

高木が留学から帰国した明治13年ころの日本はまだ貧しく、いったん病気になったら医者にはかかれず、死ぬしかないような人々が溢れていた。彼らを救うのは、無料で治療を受けられる病院、つまり施療病院をつくるしかなかった。高木は多くの同志とともに資金を集め、施療病院・有志共立東京病院を設立した（明治15年8月）。そして同じ思想で看護学校や医学校を次々とつくっていった。

高木はその頃のことをこのように回想している。「英国に参って一番に感じましたことは、この国の思想がすべてキリスト教を基礎としていることであります。これを見て私は、なるほどこれでなければならぬという心持が盛んに起きてきたのであります。そのまま日本に帰ってきて、どうしてもこれではなければならぬという心持が止みませんので、さっそく有志共立東京病院を建て、この博愛思想によって貧乏な人民を救済せんと欲したのであります…。また医学をもって人々の病気を治し、これを療するについては、一に看護、二に医師というぐらい看護の業が大切でありますから、看護婦の養成ということに着手しました。また一方に医学校というものをつくりまして、これら三つ（病院、看護学校、医学校）が揃えば、まずわが同胞の疾病を十分に救済することができると深く信じたのであります」と。

有志共立東京病院（Tokyo Charity Hospital）は、その名前の示すとおり、多くの有志（医師、実業家）の醵金で設立され、彼らによって運営される病院であった。そして実際の診療は高木ら4、5名の医師によって始められた。

2. 看護婦教育所の創立

しかし病院の運営は医師や実業家の醵金活動だけでは苦しくなってきたため、華族や政治家の夫人からなる「婦人慈善会」が結成されて、これが病院の経済的援助をすることになった（明治17年5月）。その活動の一環が鹿鳴



鹿鳴館慈善バザーの図

館での慈善バザーであった(翌6月). 2度にわたる慈善バザーの収益金は、病院に寄付され、病院では計画中の看護婦教育所の建築費に充当することにした。

実は有志共立東京病院は創立いらい患者は日増しに増加し、看護婦の必要性もつよく叫ばれていたのであるが、まだ経済的に思うにまかせない状態にあったのである。婦人慈善会が結成されて間もないころ、大山捨松ら慈善会員がこの病院を参観したとき、この病院に正規の看護婦が一人もいないことに気がついた。高木院長にそのことを聞くと「看護婦養成の必要性は痛感しつつも、多額の経費を要するために、着手できないまま三年の月日を空しく経過してしまった」と述べた。これを聞いた捨松ら慈善会員は、教育所設立のための経済的援助を約束し、とりあえず鹿鳴館で慈善バザーを開いてみようと思い立ったのである。大山捨松は、わが国最初の女子留学生として、明治4年から10年余り米国に留学したが、その間にニュー・ヘブーン病院の看護婦コースで学んだことがあったので、日本の看護婦教育には深い関心があり、高木に上のような質問をしたのであった。

高木は、明治17年(1884)10月、有志共立東京病院看護婦教育所の初代教師として、米国人ミス・リード(Mary E. Reade)を招き、看護法を教授させることにした。彼女は米国長老派ミッションに所属する宣教看護婦であり、米国でナイチンゲール式の看護教育を受けたのち来日していたのであった(1881年秋)。

ミス・リードは看護の知識・技術を教育するばかりでなく同時にキリスト教を布教することも許された。後年(昭和10年)、看護婦教育所創立50周年記念祝賀会において、時の教育所長・高木喜寛はこのように述べている。「本教育所はわが国における正規の看護婦養成所の嚆矢であります。本教育所において初めて教授を委嘱いたしましたのは、米国人ミス・リードでありました。リード氏はその任にあたり最も懇切に薫陶の労をとられ、かつ二カ年余も無給にて勤務せられた篤志家であります」と、ミス・リードは短い期間ではあったが、初期の看護教育にとってきわめて重要な役割をはたして、明治20年2月に帰国した。彼女の宗教的影響もまた大きく、教育所の教師、生徒の多くがキリスト教の信仰に入った。看護婦教育所の教育方針はその後少しずつ変わったが、「その成績のもっとも良好なりしはキリスト教時代にして、

秀抜なる看護婦として社会に信用を有せしは実にリード嬢時代の看護婦なり」と評された。



ミス・リード

ミス・リードが在任したころ、看護婦教育所の生徒を採用する方法も決められた。それはまず2、3ヶ月間病院で実地を見習わせたのち、試験によって適正が認められた者に入学を許可するというものであった(したがって見習い期間中は仮入学ともいわれた)。明治18年度(一回生)の看護婦見習いには13名が採用され、そのうちから5名が試験によって入学が許可された(明治18年11月20日に13名が見習生にな

り、病室で看護実習を行ったのち、大石テル、吉岡ヨウ、鈴木キク、近藤カツが19年1月25日に、板谷コトが2月13日に、計5名の生徒として採用されたのである)。

看護婦教育所の建物は明治19年1月20日に落成しているのので、この落成をまって上の5名を入学させたものと想像される。このように慈恵における看護婦教育の開始は厳密に言えば明治17年10月であり、組織だった教育は明治18年11月から始まったと考えてよいであろう。その教育内容については、学説としては解剖、生理、看護法が、実際としては解剖、包帯、巴布製法が教授された。教育年限は約2年であり、上記5名は明治21年2月に卒業した。後に大日本看護婦人矯風会の大関和は、この卒業生のことを感激をこめてこのように称えた。「明治21年2月をもって卒業授与の盛典を挙行せられ、神と人の前において我が国看護婦の栄冠を受けられぬ。これ我が国看護婦の率先者にして私らのため模範となられし人々なりし」と。

高木はかねがね「医師と看護婦は車の両輪の如し」と力説していたが、こ



看護婦教育所

の看護婦教育所の設立によって初めて彼の理想とする両輪（医師と看護婦）を育てることができたのである。

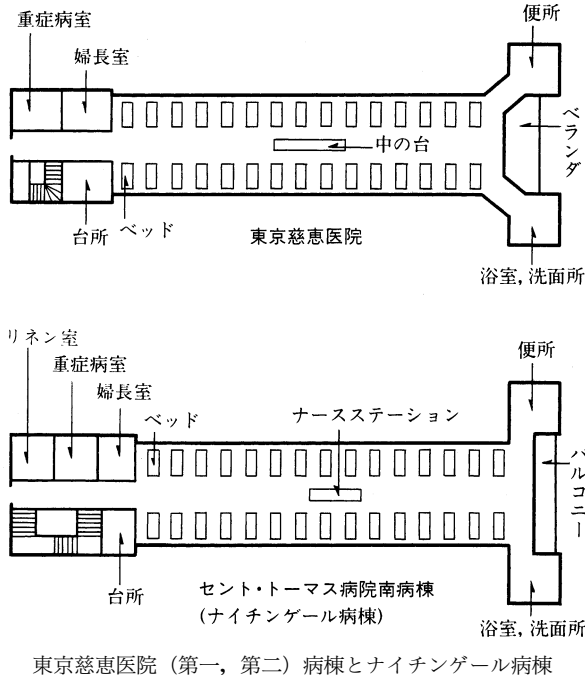
3. ナイチンゲール精神の実践

施療病院の宿命で、患者数が増えれば増えるほど病院経費も増え、これを婦人慈善会が背負うのは次第に無理になってきた。もっと大きな財源が必要になってきたのである。そこで高木は、皇后陛下にこの病院の総裁になっていただき、この慈善事業に参加していただけないか、と考えた。これは彼が英国で学んだ英国王室と施療病院との関係であった。

幸いに、この願いは現実となり、これを機に有志共立東京病院は東京慈恵医院と改称され、皇后陛下の保護のもとに大きく前進することになった（明治20年4月。看護婦教育所も東京慈恵医院看護婦教育所と改称された）。そして皇后からの御下賜金によって次々と施設が整えられていった。先の看護婦教育所に後れて落成した看護婦寄宿舍、第一号病棟、第二号病棟、第三号病棟などがそれである。

このうちもっとも興味深いのは第一号病棟と（それに対称的な）第二号病棟である。これは高木が留学していたセント・トーマス病院のナイチンゲール病棟を手本にしてつくられたものであった（次頁の図参照）。

もともとナイチンゲール病棟の設立は「看護そのものは病床でのみ教えられ、講義や書物では教えられない」といった彼女の看護教育の姿勢からもきているので、看護学生によく利用されたのは当然であるが、また医学生の実習にも非常によく利用された。その構造はワンルーム形式の大病室で、天井は高く、広い床には左右一列に15床ずつのベッドが並んでおり、1ベッドに1つずつの上下に長い窓が配置してあった。隣のベッドとのあいだもゆったりしていて、プライバシーを守るためにカーテンはあったが、ほとんど使用することなく、病棟全体がいつでも見通せた。そして左右一列に並んだベッドとベッドのあいだの広い空間には、その真ん中にナースステーションが置かれ、その両脇には患者専用の長いすがあって憩いの場所になっていた。



また入り口のすぐ近くには婦長（病棟長）専用の居室があった。

これがナイチンゲール病棟や慈恵医院第一病棟、第二病棟の全体像であるが、一見してすべての状況が把握できる機能性がこの病棟の特徴であった。患者と看護婦がおたがいの存在をいつも確認できる位置にあり、患者の精神はいつも安静に保たれる。中央のナースステーション（ないし中の台）に近いベッドには重症の患者を集めるから、夜間でも患者、看護婦がたがいに姿が見られて安心できる。婦長は病棟の居室の小窓から病棟全体の状況をつねに把握することができる。構造的にも機能的にも「徹底した患者中心の世界」をつくらうとしたナイチンゲールの精神がよく表れていた。

彼女は、病む人の回復にもっとも必要なのは心の安定であることを強調していたが、その基本理念は、医療の対象は「病める臓器、病める人体」では

なく、あくまでも「病める人間、悩める人間」であるということであった。

ナイチンゲール看護婦学校やナイチンゲール病棟がもっとも活躍したのは、高木がセント・トーマス病院で学んでいたころであったから、高木はナイチンゲールの思想にも大きい影響をうけた。ナイチンゲールが、知識、教養、品性を身につけた看護婦を育てるために、生徒を中流家庭以上の出身から採用したように、高木もまた良家の子女という意味で、生徒の多くを士族から採用した。当時としてはこのようなことも自然な考え方だったのである。「悩める病者」をいたわる心は知識、教養、品性を必要とするからである。

高木自身の言葉として、ナイチンゲールの精神を語ったことはなかったが、彼の創設した医学校（後の東京慈恵会医科大学）の建学の精神である「病気を診ずして病人を診よ」などは、ナイチンゲールの精神の影響が大きいように思われる。

4. 看護婦教育所生徒・卒業生の業務

看護婦教育所を卒業した看護婦は、少なくとも3年間は教育所の業務に従事し、その分給料が支給された。業務というのは病家の要請による派出看護であった。つまり明治・大正のころは看護婦教育所の卒業生はほとんどが派出看護婦として病院外に出て活動しており、病院内の業務は、婦長とその補佐(1,2名)を除いて、ほとんどが在学生徒によって行われていたのである(しかも婦長とその補佐は3ヶ月ごとの交代であった)。

明治23年10月18日、外務大臣・大隈重信は外務省の前で暴徒の投げた爆弾のため右足を負傷し、ついに切断するという事件がおきた。たまたま付近を通りかかった高木兼寛は驚いて駆けつけ、見舞うとともに、その手術を依頼された。そして順天堂病院の佐藤進らの立会いのもとに、大隈の右足を切断した。そのとき高木はすぐに慈恵医院に連絡をとり、看護婦をよこすよう指令した。しかしその時間にはもう卒業生看護婦はすべて病家に派出していたため、院内業務中の看護生徒だけが派遣された。それは6回生(明治22年5月入学)の橋村延世、松井トラ、高部マツ、平野チサの4名であった。しか

し彼女たち生徒の仕事ぶりは予想を超えて実に立派なものであった。

派遣看護生徒たちのおかげで、3ヶ月後、大隈は全快した。このとき大隈綾子夫人から高木院長あてに丁寧な感謝状が届けられた。その書状から当時の看護婦教育所の誠実な教育とその見事な成果が容易に推測された。礼状には彼女たちの仕事振りが「周到綿密細心誠意、医師の指示を得て機を誤らず、病者の意を汲んで、声なきに聞き、形なきに見て、その一挙一動が万事に行き届いていて、それも数十日の久しきにわたっていた」と賞賛してあった。その中の「声なきに聞き、形なきに見る」という言葉に彼女たちの懸命な気持ちが伝わってくる想いがする。

明治時代は、コレラ、ペスト、天然痘、結核などの伝染病が流行して社会の医療にたいする要求が大きくなった割には、病院をふくめた医療施設がきわめて貧弱な時代であった。したがって家庭における治療や看護が依然とし



遭難した大隈重信と看護婦教育所の生徒
中列右から2人目綾子夫人

て主体にならざるをえなかった。そのため慈恵医院でも、施療患者のための院内の業務と並行して院外の派出看護の業務も同時に行わねばならなかったのである。この院外の派出看護婦の業務を担ったのが、つまり看護婦教育所卒業生たちであった。

明治21年11月14日の東京日日新聞には慈恵医院の派出看護についてこのような記事が載っている。一般には派出看護婦の存在がまだあまり知られていなかったのである。「一に看護、二に薬と言うこともありて、病人には看病ほど大切なものはなし。されば平常三五人の婢僕を召し使う上流の家にて、病人の看護をこれらに委することは心許なきことにて、医者 of 書生を頼みおくにあらざれば、十分の看病は届かざるものなり。今愛宕下の慈恵病院は、その主眼とするところ多くの看護婦を養成して、中等以上の病家のために右の便利を謀るにあれば、何人にてても申し込みしだい看護婦を派遣すべし。この看護婦は実際病人の取り扱いになれおるは勿論、病床日記を記録する等すべての医者 of 書生を頼みおくと同じく、その雇料は一日わずかに五十銭なりと言え、この上の便利はなかるべしと思わる。また同院は高木兼寛氏監督の下にあれば、高木氏の引請たる病家ならでは雇うことの出来ぬやに思うものもあるべけれど、同院は決してさる狭き主意にあらざれば、中等以上の家々に病人ある節は、宜しく同院に申し込まるべし」と。その後派出看護の依頼は急激に増え、教育所を卒業した看護婦は、多くの派出先で懸命に看護に尽くしたのであった。

明治18年に始まった派出看護は、昭和22年3月まで、62年間つづいたが、慈恵医院が大学の付属病院になったときに中止になった。